

ミシェル・ビュトールによるジュネーヴ

Genève selon Michel Butor

石橋正孝 [立教大学観光学部・准教授]

ISHIBASHI, Masataka

Résumé: Écrivain, critique et poète, Michel Butor (1926-2016) enseigne à l'Université de Genève entre 1974 et 1991. En 1986, soit juste avant de se déménager de Nice (où il vécut pendant 16 ans avec sa famille) pour s'installer à Gaillard (ville française près de Genève), il écrit une série de courts textes sous le titre général de « Concernant Genève ». Dans cet article, on va tracer la « métamorphose » de cette petite œuvre à l'occasion de ses cinq republications et le changement de la manière dont elle se lit et fait lire un autre texte qu'est la ville de Genève.

Mots-clefs: 文学観光 (tourisme littéraire), 観光文学 (étude de tourisme et de littérature), ゲニウス・ロキ (génie du lieu), ジュネーヴ (Genève)

I ミシェル・ビュトールとジュネーヴ

II 「ジュネーヴに関して」

III ミシェル・ビュトールと歩くジュネーヴ

IV 「ジュネーヴのボードレール」

V 「ジュネーヴの平穏における13の講義」, そして 組み替え

I——ミシェル・ビュトールとジュネーヴ

20世紀後半のフランスを代表する作家・詩人・批評家であるミシェル・ビュトール(1926-2016)は、全編にわたる二人称の使用が注目された小説『心変わり』(1957)がルノドー賞を受けてベストセラーとなったこともあり、1950年代のフランス文壇を席卷した「ヌーヴォ・ロマン」を代表する作家の一人として一般には認知されている。その『心変わり』自体、パリからローマに向かう夜行列車における主人公の意識の変容を精密に描き出す

ことを通じて、二つの都市のあいだの歴史的関係を問うていたように、この作家は、デビュー作である『ミラノ通り』(1954)以来、一貫して土地と人間のあいだの相互作用に関心を寄せ、作家となる以前から死の直前までフランス国外への旅行を重ねては、その経験から想を得ていくことになる。本人も繰り返し語っているように、とりわけ若年の頃のエジプト滞在、そして、作家として名声を得たあとの合衆国滞在が転機をなしており、加えて、『心変わり』におけるローマ、『サンマルコ大聖堂の描写』(1963)のヴェネツィア等、作中におけるイタリアの存在感も無視しがたく、滞在が複数回に及び、多くのテキストの対象となったという意味では日本の重要度も高い。

そんな中、ビュトール個人の生活の場として、両親が住んでいたパリ、1970年から15年以上家族とともに暮らしたニースをある意味で上回る比重を占めているにもかかわらず、いささか地味な扱いに甘んじているように思われる都市があって、それこそがジュネーヴにほかならない。

ビュトールとジュネーヴの関係は古く、1956年から翌年にかけて、当地のインターナショナルスクールで教鞭を執った時期に遡る。この時、出世作となる『心変わり』が執筆され、生涯の伴侶となるマリ＝ジョとの出会いがあった。それゆえ、ビュトールにとってジュネーヴが思い出深い場所となったであろうことは想像に難くない。その一方で、それ以前の赴任地であったエジプトやマンチェスター、テッサロニキとは異なり、ジュネーヴを離れた直後に正面からこの都市が作品に取り上げられるようなことはなく、母国の中等教育制度を客観視する機会となったことで、間接的に次の作品『段階』(1960)に寄与するにとどまった。

そして、一度は切れたかに思えたジュネーヴとの縁がふたたび繋がったのも、多分に消極的な理由からであった。1940年代の末に二度続けて大学教授資格試験に落第して始まったビュトールの

教歴はその後も順風満帆にはほど遠く、正規の教授職になかなか恵まれず、1970年秋にようやく就任できたニース大学招聘准教授(professeur associé invité)の地位も、わずか2年で打ち切られそうになる。そこで専任教授の資格を得るべく、1973年2月、トゥール大学で業績審査を受けて国家博士号を取得したものの、審査対象となった著作(評論集<レペルトワール>の最初の3巻、『驚異の物語』、『エッセイをめぐるエッセイ』、そして共著『ラブレールまたはすべて冗談だった』)に書誌が付されていないことを理由に、公教育省諮問委員会が専任教授の資格付与を頑なに拒否するという事態に至ってしまう。状況は改善するどころかえって悪化し、翌年、通常は博士課程の学生のための職位であった専任講師(maitre-assistant)への着任をニース大学に願い出るという屈辱を余儀なくされる。苦境にあったビュトールに、ジャン・スタロバンスキーを介して救いの手を差し伸べたのがジュネーヴ大学であった。

ただし、初年度(1974年秋から翌年の夏まで)は招聘教授(professeur invité)としてであり、翌年度には特任教授(professeur extraordinaire)に任用されたとはいえ、正教授(professeur ordinaire)に昇格したのはさらに後のことだった。この間、ジュネーヴ市内——ニース大学専任講師を兼任していた初年度は大学所有のヴィラ・リゴー、翌年度はアテネ通り、次いで大学のすぐ近くのオーラス＝ベネディクト・ソシュール通り、最終的にレゾー＝ヴィーヴ地区のナン通り34番地——に部屋を借り、火曜の朝にニースを発ってジュネーヴに向かい、木曜の夕方ないし金曜の朝にニースに戻る「二重生活」——すなわち、ニースでは作家にして家庭人、ジュネーヴでは大学教授——を続ける。交通手段はしばらくのあいだ鉄道であったが、やがて飛行機に変わる。

こうした生活が12年も続くと、頑健なビュトールといえどもさすがに体力的な限界を感じたと見

え、子どもたちが実家を離れたこともあり、停年を5年後に控えた1986年7月、いったんニースを引き払うことになる。ジュネーヴに手頃な物件が見つからなかったため、転居先は隣接するフランスの町ガイヤールであった。ここに借りた家を〈境界〉荘(A la frontière)と命名。この時点でニースの〈対蹠点〉荘(Aux Antipodes)は手放しておらず、貸家としていたことから明らかなように、退職後には愛着のあるニースに戻るつもりでいたところが3年後の1989年7月になって〈対蹠点〉荘を売却、終の住処となる家屋を、ジュネーヴ近郊のフランスの村リュサンジュに購入する。執筆に好影響をもたらすと期待された豊かな自然は、リュサンジュにしかないわけではない以上、必要条件にすぎない。あくまで結果的とはいえ、ジュネーヴを生活の場から切り離された職場として最終的に位置づけつつ、そこが職場ではなくなったあともその傍らにとどまることを選んだのだ。

北向きに弧を描いた弓形のレマン湖の西側の先端、およびそこから流れ出るローヌ河によって南北に分けられ、そのローヌ河に合流するアルヴ川に南を区切られ、さながらフランスに囲まれた島のようにあり、国連や赤十字の本部が所在するジュネーヴは、周辺に住むフランス人にとって外国でありながら半ば外国ではなく、それ自体が境界のような都市である。人が一時的に集合しては離散していく通過点としての側面にジュネーヴの特質を求める時、そうしたジュネーヴらしさを最大限に持続させるには、付かず離れずの距離が求められるだろう。それでいて、リュサンジュの新居を〈隔離〉荘(A l'écart)と命名したように、愛しつつ憎まずにはいられないパリからあたる限り距離を置きたい、という欲望も、ニースにいた時と同様に満たされる。

結論を先取りしてしまうと、パリがいわば「正の中心」であるとすれば、ビュトールにとってジュネーヴとは、その反転である「負の中心」、こ

のあと登場するボードレールの散文詩「群衆」のいう「空っぽな[vacant]」場所であって、自らが視線を集めるというより、パリならパリというほかの場所を映し出し、その特徴を浮かび上がらせる鏡であり、観測所なのではないか。だとすれば、この都市以上にビュトール自身の作品——特に〈土地の精霊〉シリーズ——に「似た」場所はほかになく、とすら試みてみたくなる。芸術家との共作であるリーヴル・ダルチストは別にして、ビュトールがジュネーヴを正面から取り上げた唯一のテキストである「ジュネーヴに関して」の末尾に、「1986年4月、ニースにて」とことさらに記載されているのは、その意味で興味深い。事実、この時に検討されていたようにジュネーヴに転居してしまったら最後、ほかのどの都市にも増してこの街は純粋な対象ではなくなり、執筆中の作品と同様、生きられる対象となる以上、仮に一定期間外国で滞在する機会が巡ってきたとしても、その間にすら自らのジュネーヴ像を定着させることはできない——この事実にはビュトールが自覚的であったことを、この日付と場所のやや例外的な記載は示唆しているように思われる。

その意味からも注目すべきなのは、このテキストが、初出以降、文章そのものはほぼ同じまま、実に20年以上の期間に5度も形を変えて「再利用」されている事実である。雑誌等に単発的に発表した短めのテキストをさらに断片化し、同じように断片化したほかの複数のテキストとモザイク状に組み合わせて一冊の書物を構成するのは、フランスではいわゆる「書き下ろし」が原則となっている長編小説を書かなくなった1960年代以降のビュトールの常套的な手法ではあり、そうした再利用が3度、あるいは4度に及ぶこと自体、決して珍しくはない。画家との共作のために執筆した詩文をまとめたシリーズ〈イリュストラシオン〉の第2巻(1969)、そして、紀行文やそれに類するテキストを集めたシリーズ〈土地の精霊〉の第2巻(1971)

以降にとりわけ顕著となるこの手法は、ビュートルがある自作をほかの自作との関係において読み直す過程でその新たな可能性を発見し、別の作品へと生まれ変わらせていたことを意味する。「ジュネーヴに関して」の特異性は、別のテキスト——しかもそれ自体、単独で提示されることは決してなく、あくまで従属的な地位に甘んじている点で特異なテキスト——が組み合わされる過程で、元のテキストが提示される仕方が変わっていくことにある。言い換えれば、ジュネーヴをめぐるこのテキストは、その再生能力において抜きん出ているのである。

個々のビュートル作品がそれ自体の解明＝対象化を目指す二重体であり、読者に操作される可動体であるのに対し、ビュートル作品に似たジュネーヴをめぐるテキストは、作者が自作のモビール性を実演してみせるのに最適だったといえるのではないか。このテキストは、ジュネーヴというテキストをビュートルが読んだ結果であると同時に、時間の経過やほかのテキストとの関係に伴ってその読み方が変われば必然的にジュネーヴの「読み方」も変わり、逆もまた真であるがゆえに、5度の「転生」は、二つの読みの相互作用が極めて生産的に働いたこと、働きうることを示唆している。こうした仮説の妥当性を示すためには、テキストの内容を分析するのはもちろん、その後の5度にわたる「転生」を通してテキストが読者に対していかに提示されているのかを確認し、その意味を考察する必要がある。最終的には、複数化されたこのテキストを携えてジュネーヴの街を歩いてみる時、われわれがこの街に注ぐまなざしがいかに変化し、逆にテキストの読み方がどのように変わるのか、実地に確認してみなければならない。本論考が目指すのは、この最終段階のための準備作業である。

そこでまず、出発点となった「ジュネーヴに関して」の構成を精査し、議論の前提とする。次い

で、2023年現在のジュネーヴとも適宜照合しながら、この作品を構成するテキストの内容を確認し、そのうえで、5度の「転生」においてテキストが提示される仕方に生じる変化を追っていく。

II——「ジュネーヴに関して」

このテキストの初出は、1986年6月に刊行されたミシェル・メナシェ編『レマン、岸辺なき表現』(図1)である。比較的大判の書物で、写真や挿絵が豊富に含まれ、途中にはカラー写真をまとめて掲載したページもある。3部からなり、第1部「人々を混ぜ合わせる湖」は、レマン湖における漁業をめぐる文章やインタビューが7本、第2部「言葉を混ぜ合わせる湖」は、詩を中心に、レマン湖をテーマにした24人の文学者による作品が並び、第3部は作曲家フランク・ロワヨン・ル・メ(1952-1993)による「この水のためのカンタータ」の楽譜を収録している。ビュートルのテキストは、第2部の3番目に

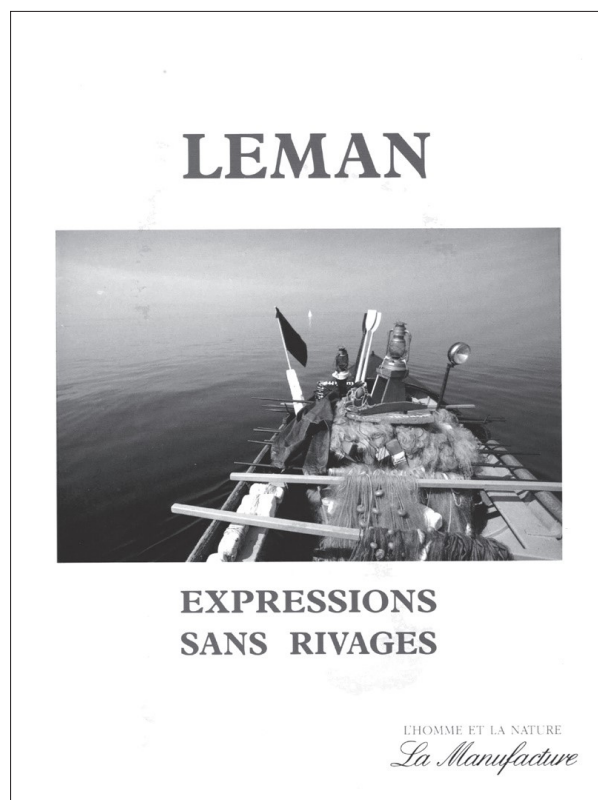


図1 ミシェル・メナシェ編『レマン、岸辺なき表現』

置かれている。収録作のなかでは群を抜いて長い
が、写真や挿絵は入れられていない。

ジュネーヴ市内ないしその近郊の地点が15箇所、
ジュネーヴ美術歴史博物館に所蔵されている絵画
作品が2作、計17の「トボス」が選ばれ、そのそれぞ
れについて、段落分けがなく、単独でも読みうる
短いテキストが連なり、それらのあいだに、ビュ
ートル自身が20年前に発表したルソー論「世界の果
ての島」(初出1966年、1968年初版刊行の〈レペルト
ワールⅢ〉に収録)からの抜粋が6点挟み込まれ、後
者は原文における前後関係を保っている。すなわ
ち、第Ⅷ章「小説における地理学」の後半から2箇
所、第Ⅸ章「水辺と言語」の前半、第Ⅹ章「世界一
周」の前半、第ⅩⅤ章「世界全体のワイン」の前半、
第ⅩⅥ章「人類の島」から1箇所ずつ抜粋され、それ
ぞれに「ルソー・コレージュ」「ルソー湖」「ルソー
島」「ルソー公園」「ルソー激流」「ルソー光学」という
題が新たに付され、元々はあった段落分けがすべ
て解消されて、それら以外の断章——「ルソー論」
パートに対し、「ガイド」パートと呼ぶことにしよ
う——とのあいだにありうべき形式上の差異化が
一切施されていない。なお、「ルソー島」にだけ、
原典にはない以下の一文が加筆されている。
「[ジュネーヴ湖には島がないが]われわれは湖が
ローヌ河に戻る時に改めてそれを見出す、ジュ
ネーヴの街中に設られた小さな群島を」。

ジュネーヴで生を享け、「ジュネーヴ市民」を自
称したジャン＝ジャック・ルソーは、この街と
切っても切り離せない。そのルソーによる小説『新
エロイズ』に読み取られるレマン湖の描写および
作中におけるその機能を通じて、具体的な場所を
めぐる個別的な記述とは異なる一種のメタレヴェ
ル——ルソーにとって、レマン湖は反転された島、
言語が発生した場所であり、自然人がその底に「水
没」している空白である——を導入すること。それ
こそがこのルソー論を抜粋する目的であるはずだ。
事実、「ルソー・コレージュ」(1969年に創設され、

ジュネーヴに現存する公立の高等学校と同じ名前)
「ルソー島」(ローヌ河がレマン湖を出てすぐのと
ころにあり、ルソーの銅像が設置されている小さな
島と同じ名前)を除き、土地や作品が主題でないこ
とがタイトルからして明らかなので、前後の章と
は異質である。実際に読んでみれば、「ルソー・コ
レージュ」はいきなり説明抜きに「彼」を主語とする
文章で始まっているため、引用元を読んだことが
ない読者にも引用であることはわかる。

「ガイド」パートとの形式上の区別を廃したのは、
この質的な違いを読者が自ら感じ取るよう仕向け
るためだと考えられなくもない。つまり、「ルソー
論」パートが来るたびに「区切り」が生じていると体
感させるためだ、と。そこで二系列のそれぞれに
番号を振り、「ルソー論」パートが来るたびに改行
してみると、以下ようになる。

I ①ジョンクシオン

①ルソー・コレージュ

II ②ロシア教会 ③奇跡の漁り ④マシーン橋

②ルソー湖

III ⑤エチューヴ通り ⑥サレーヴ ⑦レゾー＝ ヴィーヴ地区

③ルソー島

IV ⑧宗教改革記念碑 ⑨空港 ⑩民族誌博物館

④ルソー公園

V ⑪レゾー＝ヴィーヴ駅 ⑫噴水 ⑬ヴィラ・リ ゴー

⑤ルソー激流

VI ⑭産業機関 ⑮リオタールの髭 ⑯パレ・ウィ ルソン

⑥ルソー光学

VII ⑰プランパレ・ロータリー

一見してすぐに明らかなのは、「ガイド」パート
の17章が、序章と終章を除き、3章ずつに区切られ
ていることである。そのため、「空港」の章を中心

に全体が左右対称になっている。この中心性は、ある仕掛けによってさらに際立たせられている。「本文」が始まる前に、各章のタイトルと同じ太めの活字で「12番線の行程」とあり、同じ言葉が締めくくりにも置かれている。「12番線」とは、1930年代から多くの路線が廃線に追い込まれたジュネーヴの路面電車のうち、1969年6月以降、1992年までの期間に唯一生き残っていた路線のことである(その後、路面電車は復活を遂げ、2023年12月現在では12番線のほか、14, 15, 17, 18番の計5路線が営業している)。ビュートルは、ジュネーヴにおける仮住まいと大学の往復に利用していた12番線に個人的愛着を抱いていたとおぼしく、「本文」中でも12番線やその停留所に言及し、「モラルとロシュのあいだの左岸の曲がりくねった真の背骨」(「エチューヴ通り」)と呼んでいる。先述の「ある仕掛け」とは、ジュネーヴ市の南の境をなすアルヴ川の向こうにある町カルージュから、ローヌ河畔のベレールまで北上したのち、東に向かってフランスとの国境に隣接したモワルシュラーズに達するこの路線の26停留所(現在の路線とは若干の異同がある)が4つずつ、各章の前後に順番に配されていることなのだが、「カルージュ—アンシエンヌ—マルシェ—アルム」の次は「マルシェ—アルム—ブランシュ—オーギュスタン」という具合に、直前の4つの停留所のうち、後半の2つが必ず繰り返されているため、ある章から次の章への移動(それはしばしばある場所から別の場所への移動である)のあいだに、その都度、最小の循環が生じ、12番線を螺旋状の運動がなぞっていく。そして、11番目の章である「宗教改革記念碑」と続く「空港」のあいだの「ペーヨネクス—フランソワ—ジャキエ—トロンシェ—モワルシュラーズ」(12番目のセット)において終点に到達、その次は「モワルシュラーズ—トロンシェ—フランソワ—ジャキエ—ペーヨネクス」となって折り返し、以後はふたたび「フランソワ—ジャキエ—ペーヨネクス—ルイ—ファール—ルート

ロワ—マルティール」と続き、24番目の「アルム—マルシェ—アンシエンヌ—カルージュ」が全体を締めくくる。ということは、「空港」の章では循環が起きず、終点に留まったまま、あるいは終点から始点への切り替えがなされるのである。

「ガイド」パートで主題化されている場所や絵画作品の所在地(美術歴史博物館)の過半は12番線に近いものの、それらの章による行程と「12番線の行程」は数度近接こそすれ、基本的には連動しておらず、そのため、「ルソー論」パートを含めた全体が等しく同じ運動に巻き込まれ、あるいはその一方方向性と対照されている。12番線の停留所を12組に分けて並べ、往復運動を仕組むために23の章が必要とされたのか、あるいは逆に、章が23あることからこうした仕掛けが発想されたのか。

このような問いが浮上するのは、次にこのテキストが再利用される『夢の都市たちのヨーロッパ——ジュネーヴ』(1986年11月)(図2)には、12番線の行程がなく、章の数も異なっているからだ。叢

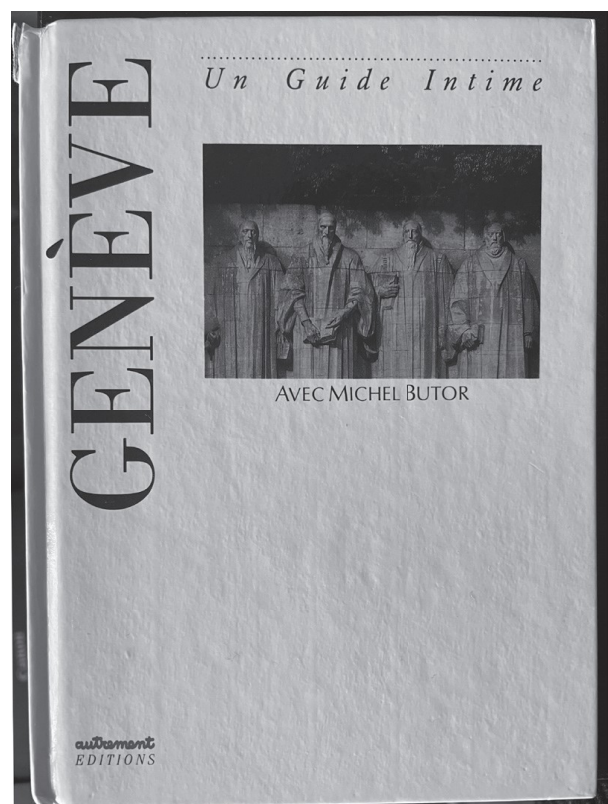


図2 『夢の都市たちのヨーロッパ——ジュネーヴ』

書〈夢の都市たちのヨーロッパ〉は、出版社オート
ルモンが1986年から翌年にかけて、24冊刊行したシ
リーズで、「私的ガイド」と銘打たれているように、
一つの都市を対象に一人の作家がエッセイを寄せ、
一人の写真家の作品、そして過去の様々な作家た
ちの引用集、飲食店、ショッピング、名所のリス
トとその簡単な説明がそれに続く構成で、判型も
小さければ、ページ数も55ページと薄い。

このシリーズの『ジュネーヴ』にビュートルの
「ジュネーヴに関して」が——このタイトルともど
も——流用されているわけだが、事態は実際には
その逆だった可能性がある。というのも、『レマン、
岸辺なき表現』における初出の際に、このテキスト
は、叢書〈夢の都市たちのヨーロッパ〉の監修者で
あるジャン＝ピエール・ル・ダンテック(1943年
生)を献呈先としていたからだ。このシリーズのた
めに依頼された原稿を別の場で先に発表すること
を許可してくれたル・ダンテックに対し、このよ
うな形で謝意を表明したのではないかと疑わせ
る。実のところ、「ジュネーヴに関して」はレマン
湖を直接取り上げておらず、したがって、小説『新
エロイーズ』におけるこの湖の意味作用を論じる
「ルソー論」パートが仮になかったら、レマン湖を
めぐる書物ではかなり場違いとなっていたように
思われる反面、ジュネーヴに関する「私的ガイド」
と称されるにはまことにふさわしい。

以上の推測が当たっていた場合、『ジュネーヴ
——夢の都市たちのヨーロッパ』における以下の構
成がむしろ最初のヴァージョンに相当する。

I ①ジョンクシヨン

①ルソー湖

II ②ロシア教会 ③奇跡の漁り ④マシーン橋 ⑤エチューヴ通り ⑥サレーヴ

②ルソー島

III ⑦レゾー＝ヴィーヴ地区 ⑧宗教改革記念碑

⑨空港 ⑩民族誌博物館 ⑪レゾー＝ヴィーヴ

駅

③ルソー公園

IV ⑫噴水 ⑬ヴィラ・リゴー ⑭産業機関 ⑮リ オタールの髭 ⑯パレ・ウィルソン

④ルソー激流

V ⑰プランパレ・ロータリー

2系列を合計すれば全21章となり、ビュートルに
よる全5巻の評論集〈レペルトワール〉各巻の収録作
品数と同じになる。初出バージョンとの違いは、
「ルソー論」パートが2章「減って」おり、これに伴っ
て「ガイド」パートが3章ずつではなく、5章ずつに
分けられていることだ。今回「ルソー湖」と題され
ているのは、初出では「ルソー・コレージュ」と題
されていた抜粋であり、同じく初出では「ルソー
湖」と題されていた抜粋、そして「ルソー光学」が今
回はどちらも存在しない。「ルソー論」パートだけ
本文がイタリックで組まれているのはそこが「ガイ
ド」ではないことを強調しているようであり、「私
的ガイド」という性格上、「ルソー論」パートを最低
限にとどめ、「ガイド」パートの割合を相対的に増
やしたという見方も可能であるとはいえ、やはり
この構成が当初のそれであって、12番線の行程を
加えるべく、あとからルソー論の抜粋を二箇所増
やした、と考える方が自然ではないか。

いずれにせよ、12番線の行程が章の数を左右し
たのはほぼ確実である。5章ずつのセットと3章ず
つのセットでは、当然、読み方に違いが出てくる。
この点については、12番線の行程にすぎなかった
パートが発展し、二種の単行本への収録が区切り
を変化させる過程を確認してからまとめて検討す
ることとし、その前に、ビュートルが選択した17
のスポットについてどのようなことが語られてい
るのか概観しておこう。

III——ミシェル・ビュートルと歩くジュネーヴ

17章の順番は一貫して変わっていないので、順番通りに見ていく。「**ジョンクシオン**」とは、ロワール河とアルヴ川が合流し、舳先のようにになっている箇所である。ビュートルも書いているように、2つの川の間で土地が次第に狭まっていく先にバスと路面電車の営業所があって、その向こうは公園になっている。とりわけロワール河の側は水が澄み切っていて色合いが美しく、対岸は切り立った崖になっており、街中とは思えない風景が展開している(図3)。しかし、それ以上にビュートルを惹きつけたのはおそらく、合流を意味する地名〈ジョンクシオン〉であろう。続く「**ロシア教会**」で語られるのは、56年から翌年にかけての最初の滞在で下宿したレゾー＝ヴィーヴ〔les Eaux-Vives, 「激流」の意味がある〕地区のヴィラ、そして、そこの屋根裏部屋で『心変わり』を執筆したり、インターナショナルスクールの生徒の宿題を採点したりしながら窓越しに眺めたロシア教会の金色の丸屋根のことである。ビュートルは語っていないが、コンラッドの小説『西欧人の眼に』で19世紀ジュネーヴのロシア人コミュニティが描かれるように、ジュネーヴには伝統的にロシア人が多い(ちなみに、ドストエフスキーもアンナ夫人とともにこの地に滞在し、そこで生まれた娘ソフィアを生後三ヶ月にして肺炎で失っているが、その小さな墓がロワ墓地の片隅にある)。「**奇跡の漁り**」では、コンラート・ヴィッツによる同題絵画において、聖書の有名な逸話がレマン湖に舞台を移して細部までくっきりと描き出されるさまが語られる。「ルソー論」パートと同じく、レマン湖に託された象徴性——ここでは現実と超現実、時間の前後関係等を易々と反転させる鏡——が注目されている。

「**マシーン橋**」は、そのレマン湖から流れ出した



図3 ジョンクシオン，ローヌ河側



図4 マシーン橋

ローヌ河に架かる橋で、時計台のある特徴的な建物がその半ばに建てられている(図4)。後出のジュネーヴ産業機関(SIG)の展示施設であるが、かつてはローヌ河の水位を調整する機能を果たしていた。この建物の裏手に河を二つに分ける堰があり、それに沿った小さな橋を渡ると小島を経由して、繁華街ベレール広場に出られる(図5・6)。マシーン橋を右岸に渡り、左右に連なる建物の裏手に回り込むと、細い「**エチューヴ通り**」が伸びている。ここもビュートルにとっては最初の滞在の記憶と結びついている。当時は小さなビストロが軒を連ね、流しの歌手とアコーディオン奏者がそれらを巡回していたという。このテキストが執筆された1986年にはすでに往時の賑わいはなかったとすれば、現在はそれ以上に寂れた裏通りにすぎ



図5 左岸側から見た堰



図6 裏側から見た堰



図7 エチューヴ通り

ない(図7)。

続く「サレーヴ」は、ジュネーヴの真南に聳えるフランスの岩山。ケーブルカーが設置されており、ジュネーヴ市民たちの行楽地であると同時に、エアーズロックや日本三景、カアバに通じる象徴性があるとビュートルはいう。頂上からジュネーヴとその周辺を一望できる点が特に気に入ったのであろう。「ロシア教会」で回想されたヴィラ、そしてインターナショナルスクールも近くにある「レゾー＝ヴィーヴ地区」は、ビュートルがジュネーヴ市内で借りた最後の部屋があった馴染み深い界限である(図8)。商店等は別として、ここで語られる付近の「地誌」は、現在も基本的に変っていない。そこからビュートルが通ったジュネーヴ大学文学部は、旧市街に近いバスティオン公園の中にある。そこに設置された「宗教改革記念碑」をタイトルに冠した一文で仄めかされているように、この公園には元々植物園があった。植物学者でもあったルソー所縁の街にふさわしく、現在は国連本部の近くに広大な植物園があって、ビュートルお気に入りの場所の一つだった。ジュネーヴのこ



図8 ビュートルが居住していた建物

の「ラッシュモア」について、その前で日本人観光客が記念撮影をし合う姿が常時見られ(現在はまったく見られない)、ブルガリアの芸術家(クリストのことか)による梱包アートの申請を市当局が却下したものの、執筆時現在は洗浄作業のために「梱包」が実現していると述べるビュートルの筆致は、記念碑の厳しさを和らげようとしているかのようで、彼にとってこの街の中心はあくまで「空港」の方なのである(図9)。フランスの税関も設置されているやや特殊なこの空港こそ、彼に

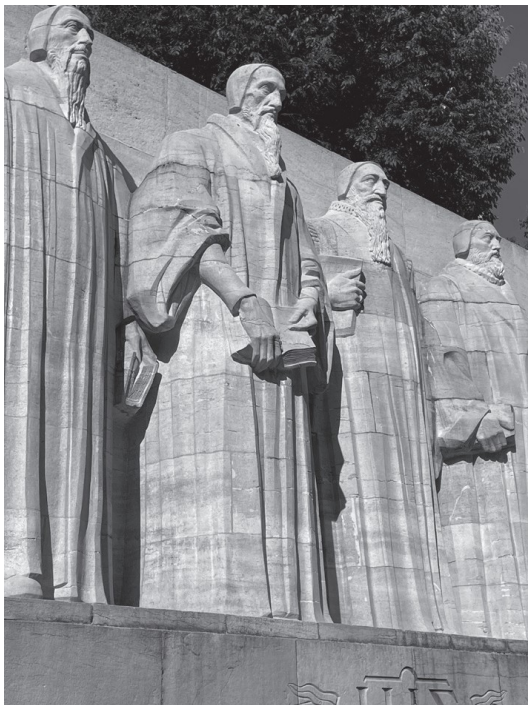


図9 宗教改革記念碑

ととてもっとも馴染み深いスポットにほかならない。

後半の最初に来る「**民族誌博物館**」は大学からも近く、かつてはその前に立てられていたツィムシアン族のトーテムポール(現在は近くの別の公園に移されている)を介して、〈土地の精霊〉シリーズに接続する場所である。現在の展示スペースは地下が中心となっており、2023年には動物と人間の関係を問う野心的な企画展がそこで開催されていた。「**レゾー＝ヴィーヴ駅**」は、もっとも近いフランスの町のひとつアンヌマスに向かう列車の



図10 レゾー＝ヴィーヴ駅

発着駅(図10)。ジュネーヴからはリュサンジュに行く場合もアンヌマス経由になる。現在は、路面電車でそのままアンヌマスまで行くことができる。レマン湖にある「**噴水**」は、ジュネーヴの観光スポットの一つ(図11)。この街の際立った特徴は水と緑の豊富さにあって、ジュネーヴ産業機関が管理するこの噴水はまさに前者を体現している。レ



図11 レマン湖の「噴水」

マン湖の象徴性と結びつく時、それは天と地の間に掛けられた「ヤコブの梯子」となる。

「**ヴィラ・リゴー**」は、ジュネーヴ大学に職位を



図12 ヴィラ・リゴー

得たビュトールが最初に滞在したところで、国連事務局や植物園のすぐ近くにある。緩やかな斜面をなす公園のただ中にぽつんと建っている(図12)。2023年11月現在、バンジャマン・コンスタンとスタール夫人が座ったという石のベンチは、残念ながら見当たらなかった。すでに何度か名前が出た「産業機関」は、ジュネーヴ市内の電気と水道を管轄している機関である。「リオタールの髭」とは、「奇跡の漁り」と同様に芸術歴史博物館に展示されているジャン＝エティエンヌ・リオタールの自画像に「描き込まれた」(この言葉がパステル画には不適切である所以をビュトールは鏤説している)見事な顎髭のこと。顎髭をほとんど一本ずつ個別に描いているかのような精細さを強調したうえで、自画像完成後にそれを剃り落としたに違いない、と想像が巡らされているのは、最後を締めくくる「プランパレ・ロータリー」に設置された自身の銅像への目配せにもなっている。

レマン湖に臨む「パレ・ウィルソン」は、1920年から1936年まで国際連盟の本部が置かれていた建物で、現在は国連人権高等弁務官事務所が入っている。ただ、ビュトールが注視するのは、建物の状態の悪さを示す罅や塗料の剥落の「芸術性」であって、コンラート・ヴィッツにそれを鑑賞する目を与えられたわれわれがそこに読み取る理想と現実の乖離なのだ。罅や剥落は現在では見られな



図13 パレ・ウィルソン

くなっているものの、それがさらなる「糊塗」でないといえるのかどうか(図13)。理想が現実を糊塗する関係が、のちに書かれる「ジュネーヴは聴取する」において逆転し、現実が理想を覆い隠す時、金融の中心でもあるこの町でいっそう幅を利かせるようになった「金銭による粗野な言語」の中に、それによって可能となる「嘘、誤解、裏切り、密輸、資金洗浄」にもかかわらず、「発明され直した言説」の可能性が見出されるだろう。「プランパレ・ロータリー」は、中心街に位置するこの交通の要衝に設置されたビュトールの銅像がどのように制作されたのか、その過程を物語る。モデルとなった本人が直接型を取られた経験である。初孫の誕生を機に、この時までは剃り上げていた髭を伸ばすことにしたために、モデルと像のあいだに生じた「乖離」を埋める悪戯好きの学生は今なお現れておらず、人と乗り物が行き交うこの場所に佇む実物より小柄な「ビュトール」は、依然として髭がないまま、空港に行くためのタクシーを待ち続けている(図14)。

以上の簡単な概括からも窺われるように、ビュトールの選択は、極めてオーソドックスであると同時に独特であって、両者のバランスが絶妙である。また、自由に連想を広げていくため、タイトルになっているスポット以外の場所、例えば、すでに挙げた植物園、コルナヴァン駅、自然史博物



図14 ビュトールがジュネーヴ大学着任の頃に現役から引退した12番線の歴史的車両とともに(イベント時に撮影)

館、大劇場等にも言及がなされている。ただし、ジュネーヴ唯一の本格的な観光スポットというべき旧市街は、サンピエール大聖堂、市庁舎、ルソーの家等ですら、ほぼ黙殺されている。「境界のこの驚異的な集約、音響室、すでにして目覚ましい窓」(「ジュネーヴは聴取する」)としての側面がそこでは弱められているからだろう。

では、これらのテキストの提示がさらにどのように変わっていくのか。

IV——「ジュネーヴのボードレール」

イタリアの作家ベッペ・セバステとスイスの写真家ジャック・ベルテが共同編集した『レマン弧——場所をめぐる21の物語』(1988年10月)において大きな変化が訪れる(図15)。『レマン、岸边なき表現』のヴァージョンにあった12番線のパートに、窓外を流れ去っていく街頭風景の要素、「本文」構成章の第1文および最終文、匿名の群衆の言葉、そしてなにより、19世紀の詩人シャルル・ボード

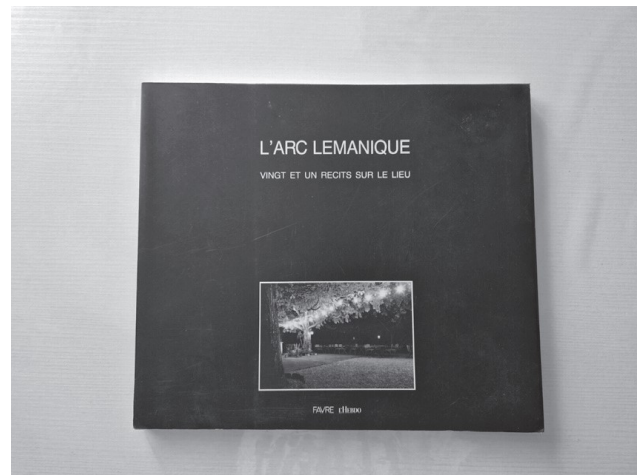


図15 『レマン弧——場所をめぐる21の物語』

レールの散文詩「群衆」(『パリの憂愁』所収)からの引用、同じ散文詩を構成する単語が規則的に組み合わせられ、全体のタイトルも「ジュネーヴに関して」から「ジュネーヴのボードレール」に変更されるのである。

ボードレールとジュネーヴ? 『悪の華』の詩人がジュネーヴとなんらかの密接な関係を有しているからここに召喚されたわけではあるまい。ビュトールはボードレールに関するエッセイを2篇執筆し(「人工楽園」『驚異の物語』)、この「ジュネーヴのボードレール」以外にも、彼の詩を素材とした作品が4篇ある(「ボードレール小品」,「プラハの目」,「方舟の難破者たち」,「シャルル・ボードレールの夢」)。ジュネーヴ大学における1978年秋から1979年春の年度では、ボードレールについて講じており、『パリの憂愁』を扱った最終回で、この散文詩集が「私の知る限り最も成功している作品のひとつ」であり、各収録作が「モビール」をなしている点で「バルザックの〈人間喜劇〉のミニチュア」である、と述べている。『パリの憂愁』はビュトールにとって文学作品の理想像であり、「どうすれば私自身にも同じようなことができるか」考え続けてきたという。

その最初の試みが1973年に発表された「ボードレール小品」(翌年刊行の『レペルトワールIV』に収録)である。ボードレール自身の、形式を同じく

する複数の詩を詩句に分割し、それらを一定の規則に従って組み合わせれば別の詩作品を生成できることを示し、そうして生み出された詩節のあいだに自作解説とボードレール『パリの憂愁』自序の抜粋が挿入されている。「ジュネーヴのボードレール」のいうタイトルは、それぞれが独立した短いテキストを連ねるという「ジュネーヴに関して」の形式それ自体が『パリの憂愁』に範を取っていることを示唆しているのではないか。ボードレール自身が構成作50篇について「すべてが互いにとって交互に頭とも尻尾ともなる」と主張したことを受け、ビュートルは、だからといってそれらの順番がどうでもいいということにはならず、そうした運動を最大限に引き起こす順番があるのだと応じる。初出以来の6バージョンを通じて「ガイド」パートの17章の順番は変わらないが、区切りが変わることで、それらの織りなすネットワーク、そこから浮かび上がるジュネーヴのイメージが変化させられる。

もちろん、ルソー論とは違う形でのこうしたメタレヴェルの導入だけがボードレール引用の目的ではない。実は、前年の1987年に、ベルトラン・ドルニー(1931-2015)と共同制作したリーヴル・ダルティスト『街路に沿って』において、ビュートルはパリを対象にして、すでに同じ方法を用いていた。19世紀パリの群衆を前提に書かれたテキストが、まずは20世紀パリの地表で地下鉄の6番線と2番線をなぞっていく仮想体験に適用され、次いで、12番線に乗って20世紀後半のジュネーヴを潜り抜ける体験に適用されたのだ。「詩人は、望むままに自分自身にも他人にもなりうるというあの比類なき特権を享受している。肉体を探して彷徨う魂のごとく、彼は、自らが望む時に、各自の人格に入り込む」のだとすれば、場所はもちろん、時代も変えられるわけで、むしろボードレールその人の魂がタイムスリップにより6番線および2番線ないし、12番線に乗せられ、乗客たるわれわれに乗

り移る、あるいはそのボードレールにわれわれが乗り移る。

「序章」「ジョンクジョン」の前に置かれた最初の断章を読んでみよう。

私は道を探している。カルージュ、12番線のかつての終着駅。一軒のパン屋。群衆。一人の盲人。ジュネーヴの湖は、幸福が可能だったかもしれない場所……。窓。アンシエンヌ。金髪。群衆という湯浴みは誰にでもできるわけではない。急ブレーキ。マルシェ。灰色の二馬力。……ジュリの一滴の母乳、彼が生まれた時に亡くなった彼の母が息子のために流すことのできなかったかけがえのない母乳。なんですって？ 笑ってやる。八時。アルム。急ぐ。

以下、11番目の「宗教改革記念碑」まで、要素が規則的に取り替えられるだけでまったく同じ構成の断章が各章の後に改行が施された上で直接続けられる。すなわち、最初は「私」を主語とする単文、最後が動詞の不定詞で、前者は直後の章に付加された断章の最後の動詞を用いており、続いて説明付きの路面電車の駅名、街頭の二要素に挟まれる形でボードレールの「群衆」の一単語、そして次の章(この場合は「ルソー・コレージュ」)の第一文の予告的引用、路面電車の次の駅の後には、全19の要素のちょうど真ん中である10番目として、街頭要素に挟まれた「群衆」の引用(ほぼ一文ずつ区切って冒頭から順番に最後まで引用されていく)、また路面電車の駅名が来て、街頭要素、前の前の章(この場合は「ルソー激流」)の最後の一文、匿名の群衆の言葉、「群衆」の一単語、時刻(章を追って30分ずつ進んでいく)、ふたたび路面電車の駅名と続く。「群衆」から抜き出される単語は、前半は原詩の冒頭から末尾まで順番に拾われるのに対し、後半のそれは、最初のみ冒頭であとは末尾か

ら冒頭に遡るように拾われている。

そして、12番目の「空港」末尾に付加された断章から以上の順番が逆転される。ちなみに、12番目の「空港」に付加された断章では「群衆」由来の2番目の単語が Offre[提供](この語は原詩に存在せず、その後のヴァージョンでまず Coffre[小箱]に、次いで最終的に Jouissance[享楽]に変えられる)になっており、18番目の「レゾー＝ヴィーヴ地区」、19番目の「産業機関」のみ、章の「本文」と断章のあいだに一行空きがあるが、意図的なものか、あるいは著者ないし編集者のミスなのか不詳。最終章「プランパレ・ローターリー」の直後に置かれた最後の断章が以下である。

急ぐ。アルム。七時半。^{ミュールティチュード}群衆。
すみません！^{バルドン}ジュネーヴの湖は、幸福が
可能だったかもしれない場所……。灰色の二
馬力。マルシェ。急ブレーキ。そして、彼ら
の天才が作り出した巨大な家族のただ中に
あって、変転極まる運命と実に貞潔な人生を
送っている彼らを憐んでいる連中を時折笑っ
てやらなければならない。金髪。アンシエン
ヌ。窓。……ジュリの一滴の母乳、彼が生ま
れた時に亡くなった彼の母が息子のために流
すことのできなかったかけがえのない母乳。
一人の盲人。布教の。一軒のパン屋。カルー
ジュ、12番線のかつての終着駅。私は道を
探している。

「群衆」の引用以外は、すべて冒頭の断章の要素が繰り返されていることがわかる。最初と最後の短文と動詞、どの町にも必ずある要素、どの町でも必ず誰かが常に口にしておかしくはない台詞以外は、12番線の駅名も含め、すべて引用を素材とし、それらを循環させるようにテキストが自動生成されている。これら24の断章を「12番線」断章と呼んでおこう。

いうまでもなく、読者の圧倒的多数は12番線の駅名を知らないの、最初のうちは、説明が付加されていないそれを無冠詞の名詞ないし単独の形容詞と取って戸惑うだろうし、「群衆」から抜き出された単語がその混乱を助長する。言い換えれば、純然たる単語として砕け散った破片(駅名と「群衆」由来の単語)、街頭で漏らされる言葉が、街頭要素を明示する冠詞付きの名詞と衝突し合う中、各章の「本文」の第一文と最終文が前者は予告的に、後者は残響として、そして「群衆」の全文が引用されていく。

ここでジュネーヴに関するテキストは一応の「完成」を見たことになる。このヴァージョンは、その翌年の1989年4月(ニースの〈対蹠点〉荘を売却し、リュサンジュに〈隔離〉荘を購入する直前)に刊行された『前味III』に収録される(図16)。〈前味〉シリーズは、既発表のテキストがより本格的な作品(〈イリュストラシオン〉シリーズや〈土地の精霊〉シリーズ)に再編されるに先立って、予告編的に複数のテ

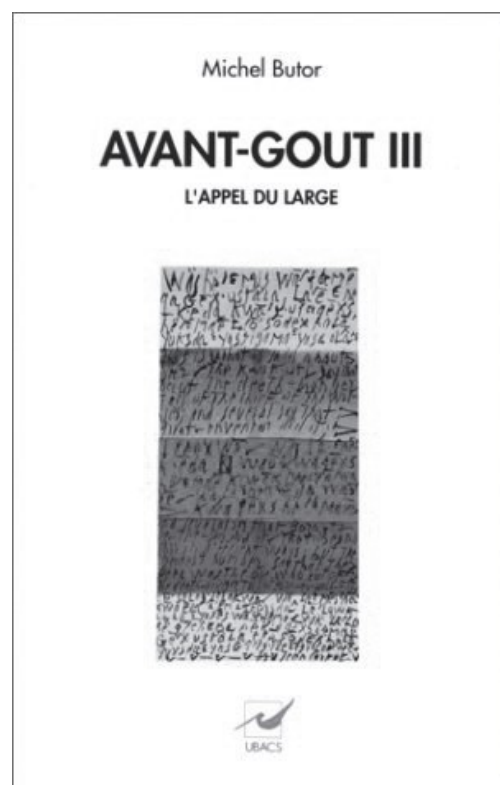


図16 『前味III』

クストを組み合わせしており、「最終形態」以外の可能性を想像させる役割も担っていると考えられる。紙幅の都合もあり、ここでは詳細に立ち入らないが、「ジュネーヴのボードレール」はほか4種類のテクストと組み合わせられ、その際、4章ずつの6つのパートに分割されている。1章分の増加は、12番目の「空港」が前半と後半に分けられたことによる。かくて新たな区分けは以下のようになる。

- I ①ジョンクシオン ❶ルソー・コレージュ ②ロシア教会 ③奇跡の漁り
- II ④マシーン橋 ❷ルソー湖 ⑤エチューヴ通り ⑥サレーヴ
- III ⑦レゾー＝ヴィーヴ地区 ❸ルソー島 ⑧宗教改革記念碑 ⑨空港
- IV ⑩空港 ⑪民族誌博物館 ❹ルソー公園 ⑫レゾー＝ヴィーヴ駅
- V ⑬噴水 ⑭ヴィラ・リゴー ❺ルソー激流 ⑮産業機関
- VI ⑯リオタールの髭 ⑰パレ・ウィルソン ❻ルソー光学 ⑱プランパレ・ロータリー

前半の3パートと後半の3パートのあいだで例によって反転が生じている。前半では2番目にあった「ルソー論」パートが後半では3番目(後ろから2番目)に移動している。そして、「12番線」断章は、それが付加されていた「本文」から1行明けて切り離され、章と章のあいだの「移行」の性格を帯びる。各パートの最後の断章は、10番目の要素たる「群衆」の引用までの前半のみ、後半は、続くパートの冒頭で同じ引用が繰り返されて始まることで、パート同士の「連結」となる。「本文」自体が二分された「空港」はこの限りではなく、第3パートの末尾と第4パートの冒頭には「12番線」断章がない。

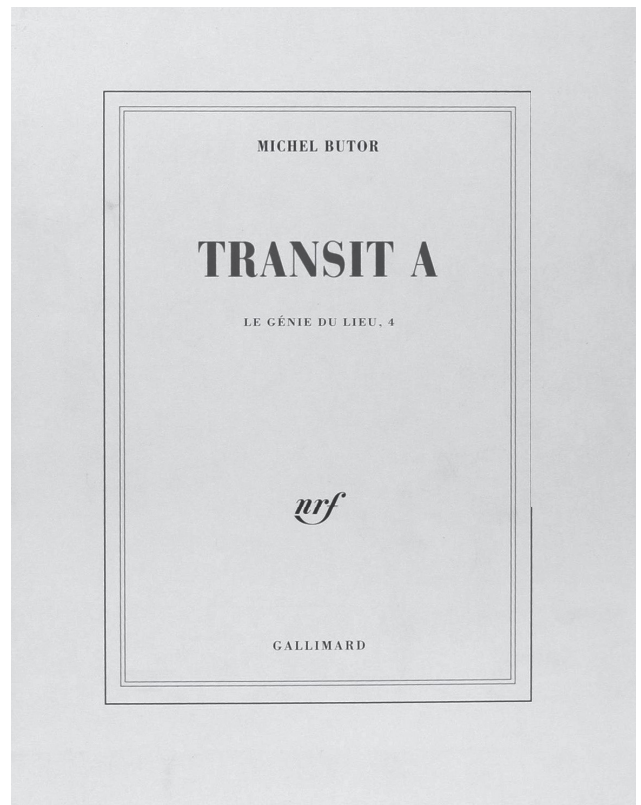


図17 『トランジット AB——土地の精霊Ⅳ』

V——「ジュネーヴの平穏における13の講義」、そして組み替え

1991年、ビュートルは、雑誌「ジュネーヴ・レットル」18号に「ジュネーヴは聴取する」と題した短文を発表する。一連のメタモルフォーズの最後のピースである。「ジュネーヴのボードレール」にこのテクストを合わせ、「ジュネーヴの平穏における13の講義」と改題されて『トランジット AB——土地の精霊Ⅳ』(1992)に収録され、パリ、エジプト、メキシコ、カナダ、日本、「大西洋横断カーニヴァル」をめぐるテクストとともにこの大判の大著をモザイク状に構成する7種のピースに含められることとなった(図17)。「13の講義」とあるように、新たに加わった「ジュネーヴは聴取する」を2章分とすれば、合計して26章、以下のごとく2章ずつのセットになる。

- I ①ジョンクシオン ❶ルソー・コレージュ

- II ②ロシア教会 ③奇跡の漁り
 III ④マシーン橋 ②ルソー湖
 IV ⑤エチューヴ通り ⑥サレーヴ
 V ⑦レゾー＝ヴィーヴ地区 ③ルソー島
 VI ⑧宗教改革記念碑 ⑨空港A
 VII ⑩-⑪ジュネーヴは聴取する
 VIII ⑫空港B ⑬民族誌博物館
 IX ④ルソー公園 ⑭レゾー＝ヴィーヴ駅
 X ⑮噴水 ⑯ヴィラ・リゴー
 XI ⑤ルソー激流 ⑰産業機関
 XII ⑱リオタールの髭 ⑲パレ・ウィルソン
 XIII ⑥ルソー光学 ⑳プランパレ・ロータリー

各ピースは見開きを単位とするパートに分けられており、各パートは4ページずつ、同一ピースのパートが2つ連続することもあるが、ジュネーヴピースのパートはこの限りでなく、最初の見開きおよび2番目の見開きともに、一方のページに「本文」の各章の全体(長い場合は他方のページから始まったり、そこまで続いたりする場合もある)、他方のページに「12番線」断章を配している。第6パートまでの前半は左側の偶数ページに「12番線」断章、右側の奇数ページに「本文」、第8パートからの後半はそれが逆になるのは、「ルソー論」パートが前半では奇数パートの後半、後半では奇数パートの前半に置かれる構成と足並みを揃えている。「本文」に段落分けがないのは従来どおりであるのに対し、「12番線」断章の方は、構造が明示されるように改行が施され、段落間は1行明けられてすっきりしたレイアウトになっている。すなわち、冒頭の短文ないし動詞の不定詞のあとで改行され、以下、すべて12番線の駅名で始まる4段落が続く構成である。「ジョンクシオン」の前に置かれた断章の冒頭、「私は道を探している」に続けて「愛している[Je t'aime]」が追加されているが、この一文は、章を追って各構成要素の後ろに順繰りに移動していく。第7パートは組み合わせるべ

き「12番線」断章がないため、「群衆」の最初の3段落がイタリックでまず置かれ、次いで「ジュネーヴは聴取する」全文、最後に「群衆」の4段落目と5段落目がやはりイタリックで引用されており、最終第6段落は、第8パートの冒頭にイタリックで配されている。なお、第7パートを挟んで、「空港B」の直後から、「12番線」断章の構成要素の順番が逆転されるわけだが、ここではそれを強調するように、第6パートの2番目の「12番線」断章を締め括る動詞不定詞 *Persister* [固執する] が断章冒頭で例外的に繰り返されている。そして、「愛している」は第6パートの2番目の断章における位置を保ったまま第7パートで逆転に巻き込まれ、以後、ふたたび後ろへと一語ずつ移動していく。

「空港」は中心ではなくなり、ビュートルのジュネーヴ観をある意味集約したテキストである「ジュネーヴは聴取する」、そしてボードレールの「群衆」が中心に据えられる。『レマン、岸边なき表現』における初出から6年を費やして、ビュートルによるジュネーヴ表象は最終形態に辿り着いたかに見える。ところが、その16年後の2008年、ナタリー・サバトの写真とミカエル・カチョッポの挿絵を入れた『変化のなかのジュネーヴ』がジュ

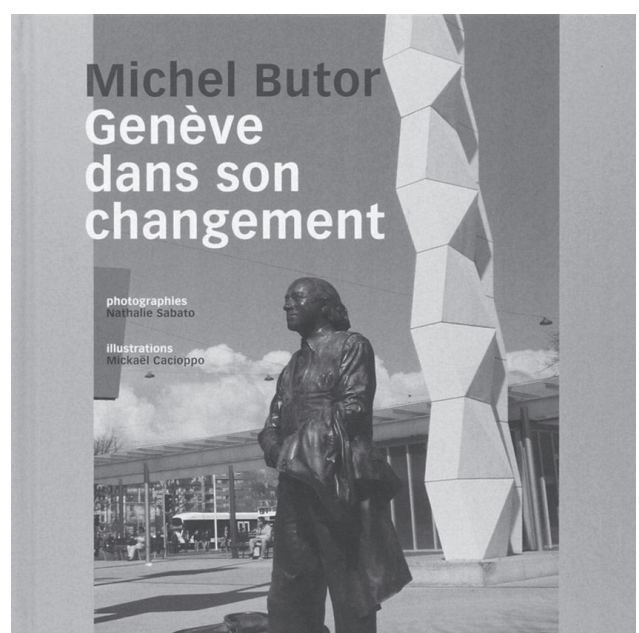


図18 『変化のなかのジュネーヴ』

ネーヴの出版社ノタリから上梓された際、自序として新しく書かれた同題の詩に続く「本文」は、『夢の都市たちのヨーロッパ——ジュネーヴ』のそれを第一部として再収録し（「ルソー論」パートもそこだけイタリックになっている）、「ジュネーヴは聴取する」が第二部をなしているのをわれわれは目にする（図18）。12番線とボードレールの冒険はなかったことにされたわけではないにせよ、「原点」への回帰が果たされ、そこから約20年の経過に伴ってジュネーヴに起きた変化を読み込むよう、読者は誘われるのだ。

1986年4月、それまでの12年間にわたるジュネーヴとの付き合いをベースに、さらにその30年前に遡る1年間の滞在の記憶が交えられた結果、そこから自ずと浮かび上がり、彼にとってのジュネーヴを代表するイメージとして見出された市内および近郊の15のスポットと2幅の絵画、そのそれぞれに関する短いテキストを執筆したことに始まる20年以上の変転を見てきた。最後に、それらの配置の変化がいかなる読み方の変化をもたらさうのかを検討する。

この場合の配置とは順番ではなく、区分けのことである以上、一つのパートにまとめられたテキスト同士の関連性を読み込むことが当然の発想である。『トランジット』であれば2章ずつ、『レマン、岸辺なき表現』であれば3章ずつ、『夢の都市たちのヨーロッパ』であれば5章ずつ読む場合、各セットの構成数が少なければ関連性を見出すよう促す力が強く働き、逆に多くなれば、対立や対照が見出されるようになる。例えば、「ロシア教会」と「奇跡の漁り」がセットになっていれば、東方正教会とカトリックの対立こそあれ、ともにジュネーヴという土着に受け入れられた宗教性が前面に出る。ここに「マシーン橋」が加われば、駅周辺の下町と旧市街を結び合わせる橋自体の機能が示す「接続」という一貫したテーマ系のみならず、レマン湖からの流出を分割＝再統合する人工の力とい

う対立軸が出てくる。さらに「エチューヴ通り」と「サレーヴ」が合流すれば、宗教性に対立する世俗性が強まるとともに、湖、駅、ベレールのいずれから見ても裏通りに当たる過去の歓楽街、スイスの外に聳える高台の行楽地の対照性が現れる。

通常の読書の方向、横書きであれば水平方向の読み方に対し、ビュートル自身の評論「ヴィヨンの韻律法」（『レペルトワールIV』に収録）を参照すれば、垂直方向の読み方も考えられ、順番そのものが変わらない今回のケースでは、こちらがより重要であるといえる。すなわち、各パートにおいて同じ順番を占めているテキスト同士の関連性を読み込む読み方である。初出の『レマン、岸辺なき表現』の3章セットであれば、

①ジョンクシオン	⑰プランパレ・ロータリー
②ロシア教会	⑤エチューヴ通り
⑧宗教改革記念碑	⑪レゾー＝ヴィーヴ駅
⑭産業機関	
③奇跡の漁り	⑥サレーヴ
⑨空港	⑫噴水
⑮リオタールの髭	
④マシーン橋	⑦レゾー＝ヴィーヴ地区
⑩民族誌博物館	⑬ヴィラ・リゴー
⑯パレ・ウィルソン	

となり、『夢の都市たちのヨーロッパ——ジュネーヴ』の5章セットであれば、

①ジョンクシオン	⑰プランパレ・ロータリー
②ロシア教会	⑦レゾー＝ヴィーヴ地区
⑫噴水	
③奇跡の漁り	⑧宗教改革記念碑
⑬ヴィラ・リゴー	
④マシーン橋	⑨空港
⑭産業機関	
⑤エチューヴ通り	⑩民族誌博物館
⑮リオタールの髭	
⑥サレーヴ	⑪レゾー＝ヴィーヴ駅
⑯パレ・ウィルソン	

そして、『前味 III』の4章セットであれば、「ルソー論」パートを除いて空白のままとすれば、

① ジョンクシヨン	④ マシーン橋	⑦ レゾー＝ヴィーヴ地区	⑩ 空港	⑬ 噴水	⑯ リオタールの髭
⑪ 民族誌博物館	⑭ ヴィラ・リゴー	⑰ パレ・ウィルソン			
② ロシア教会	⑤ エチューヴ通り	⑧ 宗教改革記念碑			
③ 奇跡の漁り	⑥ サレーヴ	⑨ 空港	⑫ レゾー＝ヴィーヴ駅	⑮ 産業機関	⑱ プランパレ・ロータリー

となり、六つからなる二系列、三つからなる二系列をそれぞれ垂直方向に読んでさらに別の組み合わせを生成できる。「ジュネーヴの平穏における13の講義」の2章セットであれば、

① ジョンクシヨン	② ロシア教会	④ マシーン橋	⑤ エチューヴ通り	⑦ レゾー＝ヴィーヴ地区	⑧ 宗教改革記念碑	⑫ 空港B	⑮ 噴水	⑱ リオタールの髭
③ 奇跡の漁り	⑥ サレーヴ	⑨ 空港A	⑬ 民族誌博物館	⑭ レゾー＝ヴィーヴ駅	⑯ ヴィラ・リゴー	⑰ 産業機関	⑲ パレ・ウィルソン	⑳ プランパレ・ロータリー

となり、この2系列をさらに垂直方向に読み、新たな系列を生成させることもできる。ジュネーヴ

を訪れたことがあり、これらの名詞についてなんらかの知識がある者であれば、ビュートルのテキストを読まず、こうした複数の組み合わせのパターンを眺めていくだけでも、各構成要素の色合いが微妙に変化するのを感じざるをえない。実際にテキストを読んでいく順番を変えれば、それらが互いに照応し合う部分も変わる。

現実の土地と照応しながら読む場合には、対象となっているスポットをたまたま訪れたので該当するテキストを読む、あるいは、たまたま訪れる機会のあるスポットがあるので、足を運ぶ前に該当するテキストを読んで準備する、といった、通常のガイドブックと同じような読み方になるだろう。そうした読み方と並行して、意識的に読む順番を変えてみる作業によって、現実という名の拘束的な偶然性の生み出す印象を相対化し、客観的な偶然によってそこから自由になる機会が与えられるだろう。ボードレール「群衆」がいう「群衆を享受する」とは、他者に憑依する自由である以上に、われわれ自身を離脱する自由のことではないか。

ビュートルの全作品、とりわけ〈土地の精霊〉シリーズは、ボードレール以外の多くの過去の作家たちのテキストの断片も巻き込んで、地球全体を対象にわれわれが自身の旅行経験と自由に戯れることができるようにする企てなのであり、ジュネーヴをめぐるテキストはその雛形をなしている。その限りにおいて、「世界の果ての島」で引かれるルソー『エミール』の言葉、「人類の島とは、地球なのだ」をもじっていえば、「人類のジュネーヴとは、地球なのだ」。

文献

- ❖ Michel Butor, « L'île au bout du monde », *Répertoire III*, Minuit, 1968. [井上櫻子訳「世界の果ての島」、石橋正孝監訳『レベルトワールⅢ』, 幻戯書房, 2023年。引用はこの邦訳を参照しつつ、文脈に合わせて適宜改変した]
- ❖ Michel Ménaché (éd.), *Léman, expressions sans rivages*, Manufacture, 1986.

- ❖ Michel Butor, *L'Europe des villes rêvées* : Genève, Autrement, 1986.
- ❖ Beppe Sebaste et Jacques Berthet (éd.), *L'arc lémanique : vingt et un récits sur le lieu*, Favre, 1988.
- ❖ Michel Butor, *Avant-goût III*, Ubacs, 1989.
- ❖ Michel Butor, *Transit A B : le génie du lieu IV*, Gallimard, 1992.
- ❖ Michel Butor, *Genève dans son changement*, Notari, 2008.

